

# 末黒野

すぐるの

8月号 (通巻876号)



# 風薫る

一川のひかり流して夏に入る  
風薫る裸婦像かをる文学館  
拾ひたきものに片蔭オフィス街  
夏燕斬る海光を袈裟がけに  
山の風森青蛙泡育て  
麦秋や捨つるべき憂さ握りしめ  
掬はれたり夕焼色の屑金魚  
横須賀や真紅の薔薇と軍艦と

松本三千夫

(名誉主宰)

# 風涼し

絵タイルの欠くる歩道や夕薄暑  
聖五月闇にくぐもる鼓の音  
夏つばめ青き野面をかすめては  
瑞泉寺夢窓国師の風涼し  
葉桜に入れば寝息を乳母車  
祭提灯下げて医院の休診日  
吹き抜くる青田の風や津軽富士  
懸命に啼く老鶯や崖つ縁  
三社祭へ人のつづきぬオフィス街  
風音の路地に入りくる宵涼し  
地下街にほてりの日傘持ち歩く  
当番医白衣のままの三尺寝

黒滝志麻子

(主宰)

# えごの花

森

清

(副主筆)

堯

山寺の藁をしのぎ糸桜  
池尻に余白のあらず花筏  
松の芯安房一望の岬道  
杜抜くる風の重たし八重桜  
目の限り朱色尽くせり躑躅山  
初夏や一川弾く日のかけら  
もつと派手にとはやす子や更衣  
葉桜や木下に昼の園児たち  
茅花流し揺れて沈まぬ笹小舟  
葉桜や潮入川の色深め  
えごの花散り点描の己が影  
里山の残る団地やほととぎす

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 玉菜

岡野里子

一年生ランドセルより手足生え  
康成忌八重山吹の山の音  
ふつくらと玉菜は春を巻きにけり  
鳥引くや海の青きに点となり  
大津絵の娘みさうや柵の藤  
紫にけぶる林泉藤の雨  
亀鳴くや眠り初めたる前頭葉  
ちりてなほあはれをとどめ白牡丹  
日を溜めて七色八色若楓  
開け放つ茶屋の蔵窓若葉風

## 清水汲む

菅野日出子

鐘楼の撞木くくられ竹の秋  
飛花落花あびて一人の浄土かな  
水門の落花の嵩や鯉跳ねて  
つつがなく令和となれる五月かな  
清水汲む列に付きたる山路かな  
引く波の鞆す浦曲や浜屋顔  
路地多き佃界隈つばめの子  
神輿見てなじみの店のもんじや焼き  
不如歸寺に二ヶ所の無縁墓  
白髪となりて悔いなし髪洗ふ



# 新 緑

田中臥石

青木重行忌や茫然と落花舞ふ  
普羅の碑の寺森閑と椿散る  
落椿前田普羅碑を明るうす  
喪の旅の宮城白石川桜  
一目千本桜の川や遠蔵王  
連休は喪に服しをり田植急  
珈琲店出づ新緑の峡の音  
新緑や水仕の妻の声徹る  
若人の五月頓挫の鬱屈期  
仮通夜の膝崩しけり五月闇

# 春惜しむ

森清信子

花の雲耳にやさしき京言葉  
一川の眼下に曲がり花吹雪  
人去りて光の去りて山桜  
洛西の山裾の古寺花楓  
鴨川の遅日の橋を渡りけり  
山葵田の風まだ硬し啄木忌  
平成の御代去る春を惜しみけり  
十連休の暮し変はらず浅蜷汁  
店内にバジリコの香やみどりの日  
軍港の波音静か紅薔薇

# 惜春

安齋久英

たんぽぽの絮潮風にみちびかれ  
巻きずしの美しき切り口春の宵  
春雷や改元の額高高と  
春の鳶杭一本に身をゆだね  
春の鳶飛行機雲を追ひながら  
春雨の平成の世を浄めけり  
征きし人送りし土手や花しどみ  
噴水の一朶の雲を目指しけり  
花合歓に触れたる風のしなやかに  
白鷺の沖を遠見の尾羽かな

# 令和の世

石黒興平

越の田の水口の幣真新し  
故郷や校歌の山の笑ひをり  
つくづくとこの国の良さ花吹雪  
蘆牙や日の燦々と沼底に  
妻共の傘寿の春を惜しみけり  
船笛や桜檠降る基地の町  
リラ冷えの淡き門灯小糠雨  
小面の柔きまなざし春惜しむ  
五月来る心新たに令和の世  
牡丹や風重さうに軽さうに

# 乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



諸葛菜

小田嶋野笛

春風を切る撫で肩や母譲り  
韃鞞の砂や飛び来る春の空  
川幅の空を潤し諸葛菜  
海女若し磯着に隠す肌の色  
海胆割つて勧められたり旅の果て  
団扇貼る思ひ思ひの胡坐かな  
以下同文と受くる賞状春行けり

飛花落花

加藤静江

風戯へ

岡田史女

桜藜ふるや平成惜しみつつ  
酔ひ痴れてみたき日のあり朧月  
根の国へ人送りけり花月夜  
風戯へせる木苺の花白し  
梨散るや風鐸の音に振りむけば  
じゃんけんの声のはじくる立夏かな  
憲法の草創の碑や薄暑光

飛花落花天馬の像の生きいきと  
長閑しや韓国庭の甕の数  
子規句碑へ沖よりの風残る花  
湧水やみなもと隠す草若葉  
夏近し浮雲よりも白き橋  
燕の子はや風となり矢となりて  
老鶯の思はぬ近さ漁師宿



若葉風

齊藤マキ子

春の星逢ふには遠き人ばかり  
朝寝して朝の仕事の間引きけり  
引鳥や峠に干支の方位盤  
常宿の軒端へすいとつばくらめ  
空港の玻璃天井や夏隣  
Uターンしたる甥つこ若葉風  
腰かけてみたき枝振り樟若葉

藤の花

堺昌子

八ヶ岳はや空泳ぐ鯉幟  
昼餉とる青葉若葉のその下に  
春雨やハンカチの花濡れそぼち  
競技場の若人の声野蒜摘む  
蝸蝸のじつと子をみる日曜日  
菩提寺や二天の房の藤の花  
麦畑穂の青青と雨意の風

風薫る

高木邦雄

文机の惰眠に喝や春の雷  
桜蔭降る廃線の鉄路かな  
菖蒲湯に払ふ邪気なき夕べかな  
港への銀杏並木や若葉風  
チャイム鳴る白亜の校舎風薫る  
薔薇闌くる園燦燦と亭午の日  
噴水に垢離搔く如し夕鴉

夕牡丹

今村千年

ふる里へ駆くる街道竹の秋  
木曾川の渡しの跡や春惜しみ  
産土の土の匂ひや筍食ぶ  
豆飯や昭和の母はまめまめし  
風薫る銀のフォークに銀の匙  
夕照の彩深めたり牡丹園  
夕牡丹をみな漫るに佇める

春の泥

及川照子

囀や力あふるる草野球  
春の泥落とす夕べの余韻かな  
入口は頭上注意や燕の巢  
筍の過保護とみゆる衣かな  
老鶯の声流麗と里の朝  
ぼうたんのやうな赤子の笑顔かな  
薫風の青一身に行く山路

柿若葉

大川暉美

文添へて蓬匂へり勝手口  
せせらぎの光綾なす糸柳  
櫛の芽子らの謡の声澄めり  
シテの声に交じる夜鴉薪能  
前シテの闇に浮き立つ薪能  
柿若葉の萌黄の色や解く五感  
田水張る棚田に夕日溢れをり



# 青炎集

## 黒滝志麻子選

横浜 廣田幸子

春寒くバスの遅るる日暮かな  
春情の気分新たや眼鏡替へ

灯台へ繋がる坂や葦草

藤の香の空澄み渡る雨上り

黄金週間令和セールの百貨店

芍薬のきりりと咲いてをりにけり

横浜 布施由岐子

宮城 門間としゑ

鈴生りの馬酔木の花や銀閣寺

御茶請は丹波黒豆花疲れ

亀鳴くや今日も葉書の待ちぼうけ

赤城山へ高菖の隊列まつしぐら

吾とともに飛花のひとひら玄關へ

永き日の剣玉遊びすぐ飽きて

狭山 沼崎千枝

大網白里 岡井マスミ

ユニフォーム一竿に揺れ新学期

リハビリの友と廊下を穀雨かな

マッサージ肩から首へ春深し

玻璃越しののらにあくびや夏きざす

白日の牡丹くづるる音すなり

自転車待つ利根の渡しを麦の風

改築の槌の二拍子春送る

令和成り一番赤き毎買ふ

借景の新樹をかくす新家かな

葉桜の並木閑けし沼ほとり

足元に猫の寄り来る薄暑かな

若葉風傘寿来ること忘しけり

横浜 鍋島武彦

**大和路や花の初瀬の観世音**

蒼天や落花に映ゆる朱の社殿  
庭先に栗鼠棲みつぎぬ春寒し  
世変りや終の一日の暖かし  
爺さんと呼ばれ一瞬冴返る  
野歩きや子の草笛に背押され

横浜 根本公子

満天星の千の鈴の音御空恋ふ  
**象の鼻包みきれざる霞かな**  
隣家は川を隔てり竹の秋

卓袱台の畳みしままや昭和の日  
楽隊の指揮者の凜とみどりの日  
父引きし水は山より聖五月

横浜 大霜朔朗

パンダ似の縞の乳牛春深し  
涸れ井戸に釣瓶遺るや春の雨  
老犬に尻尾を振られ子供の日  
改元を共に祝ふや昼蛙

**のどけしや古き赤チンなほ効き目**

服薬のひとつを止めて明易し

横浜 滝沢いみ子

残る花平成の世を惜しむかに  
**反り大き釣り手の背や浜大根**  
トマト苗植ゑて連休最後とす  
春田打済みたる谷戸の学習田  
寺領はや残る三本黄の牡丹  
鯉轍弛みて子等に尾を引かる

横浜 橋場美篤

しやぼん玉風につまづき毀れけり  
朝影や呵々大笑のチューリップ  
池の亀首伸ばしきり風光る  
黒々とおたまじやくしや鯉跳ぬる  
**寺の闇にとどく鼓や薪能**  
鰐口の一打のひびき夏の空

横浜 岩上行雄

赤色の芽立ちとなりぬ雨しとど  
チューリップ児の歌に和し若返る  
**玄関に別れの使者か花の塵**  
行く春や声しつとりとたけくらべ  
旅行鞆引く音しきり五月来る  
開発地一望の畑キャベツ巻く

# 耕 土 集

森清 堯選



植田水のさざなみ苗の揺れ止まず  
原つばに子ども見えぬ五月かな  
城跡の三重やぐら花は葉に  
子と歩く雑木の森や青嵐  
吸物に浮かぶ花の麩田植終ふ

新潟 太田チエ子

野の風や小さき花には小さき蜂  
膝痛の講演聴きぬりラの花  
嫺やかや静もる里の桐の花  
麦秋やゴッホに似たるピアニスト  
鴉らの組んず解れつ夏きざす

川崎 堀江 久子

潮匂ふ園を走る子うまこやし  
鯉の尾のひと振り蝌蚪の陣乱る  
代掻や親子揃ひの泥すがた  
マロニエの花ビル街のカフェテラス  
継りつつ繕りつつ竹の皮脱ぎぬ

横浜 宮之原隆雄

盛り土に珊瑚の欠片浜防風  
露地抜けて路地へと三社祭りかな  
屋敷や釣竿立てて握り飯  
刈込みの缺の音や夏燕  
掌中の動き柔らか蜥蜴の子

平塚 須山 漁師

花冷えやむすびの地に立つ芭蕉像  
両岸の枝垂桜や川下り  
窓明り洩るる校舎や遅桜  
砲丸を投ぐる雄叫び春惜しむ  
草笛を吹く少年の皓齒かな

横浜 和田 啓

子供等は皆子を持たず柏餅  
ねこ厭ふキャットミントや夏来る  
聖橋の夏めく風や傘雨の忌  
歳時記より考の切抜き柿若葉  
新緑や操る櫂の湖光り

横浜 大内 由紀

# 金銀草

小川玉泉

(名誉顧問)

初花の君影草をみ仏へ  
谷沿ひの並木の桜真つ盛り  
料亭の大看板をおほふ花  
風捉へ谷底目指す花吹雪  
幾世経し鎌倉山の夕ざくら  
夜雨の跡微塵も見せず車輪梅

雑記帳 25

このところ、常識では信じられない事件続きである。日本の四季の変化に心を寄せて、美しい詩心を培ってきた先人の遺産を大切に守ってゆきたいものである。